

第1章

金沢の景観特性と課題

1-1 金沢の景観の成り立ち

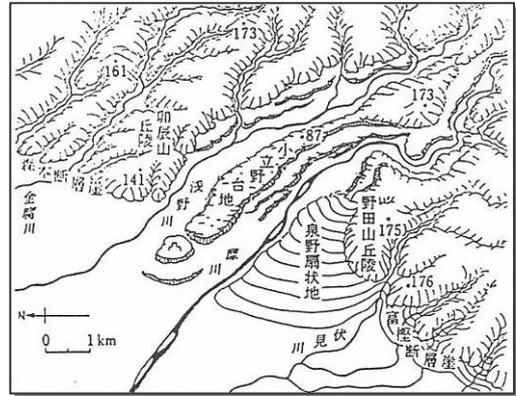
本市の地形、気候、植生、歴史、都市構造を通して、金沢の景観の成り立ちを示す。

(1) 地形

金沢の地形は、医王山地・戸室火山地・富樫山地・加賀山地から、卯辰山丘陵・小立野台地・野田山丘陵、浅野川・犀川の2河川と、そこに広がる金沢平野によって構成されており、山を背にひかえ、変化のある地形的特徴を有している。

それら変化に富んだ地形が、魅力ある景観をかたちづくる基盤となっている。

本市の地形的要素から、以下のように分類される。



1) 海岸

北東から南西方向に直線的に延びる日本海の海岸線は、海岸のパノラマ、日本海に沈む夕日など、穏やかな光景が展開し、開放的な景観を形成している。砂浜や海沿いの松林が一体となって魅力ある自然景観が広がっている。



海岸の砂浜



直線的な海岸線

2) 平地・低地

海岸線から約7～9 km内陸までの地域は、金沢平野として犀川等の諸河川によって形成された合流扇状地が広がっている。この平地・低地に北陸本線や国道、高速自動車道、金沢港等の主要な交通網が発達し、市街地が形成されている。また、郊外部には肥よくな土壌を活かした優良な農地が広がりを見せている。

一方、都市的な開発が進む中、平地部に広がる良好な農地については、景観的な視点からも重要な田園環境として貴重である。



活気のある中心市街地



肥よくな土壌の農地

第1章 金沢の景観特性と課題

3) 河川・潟

犀川や浅野川に代表される河川、野鳥が飛来する河北潟は、潤いある水辺景観を形成している。水流豊かな流れから「男川」と称される犀川と、穏やかな水の流れから「女川」と称される浅野川は、古くから市民に親しまれ、レクリエーションや憩いの場となっている。また、郷土料理の代表であるアユやゴリが生息し、浅野川の流れを利用した友禅流しは、金沢を代表する風物詩となっている。河北潟については、早くから干拓され、一帯には優良な農地が広がっている。



犀川の清流



橋の姿が映る浅野川

4) 台地・丘陵地

卯辰山丘陵や小立野台地、寺町台地、野田山丘陵から構成される台地・丘陵地は、本市の地形的特徴であり、辰巳用水をはじめとする用水の建設に通じているほか、小立野台地の先端部には金沢城が築城されるなど、特徴ある街並みや歴史が形成されてきた過程で重要な地形要素である。

さらに、台地・丘陵地の豊かな斜面緑地が金沢の景観に魅力と潤いを与えている。



台地・丘陵地の斜面緑地

5) 山地

県境の医王山から戸室山、キゴ山、卯辰山、野田山等へつながる山々は、緑豊かな自然環境を包含し、美しい山並みと良好な自然景観を呈している。

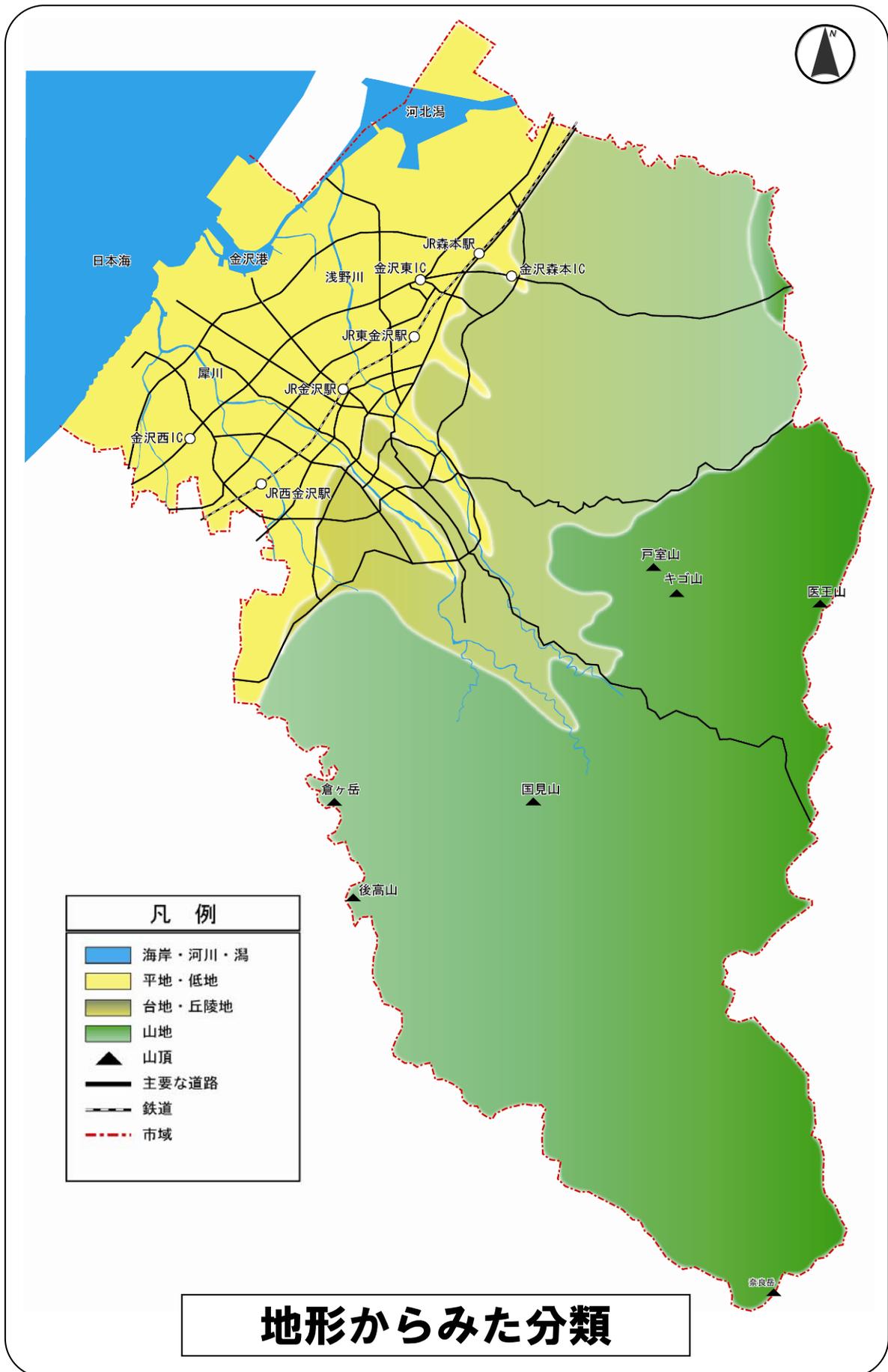
山地については、市街地からも眺望できる山地景観としての美しいスカイラインを保つとともに、緑豊かな自然環境が広がっている。



医王山・大沼と鳶岩



医王山のブナ林



資料：土地分類図（発行：財日本地図センター）

第1章 金沢の景観特性と課題

(2) 気候

金沢の気候は、全体としては典型的な日本海側気候であり、春夏秋冬の四季が明確で、年間を通じて降雨量も多く、湿度が高い。夏はフェーン現象が頻繁に起きることから、最高気温が30℃を超える日も多い。また、12月～3月の冬にかけて積雪が見られるとともに、初冬には雷が多くなり、どんよりと曇った空と寒い日が続くのが特徴である。

海岸部、平野部、山間部では、気候特性にある程度違いが見られ、山間部ほど積雪量は多くなる。湿度の高さと、良質の水に恵まれた金沢の気候風土から、静電気が起こりやすい乾燥を嫌い、箔打紙づくりにかかせない良質の水を必要とする金箔製造は、本市を代表する伝統工芸の一つとなっている。また、湿った重い雪の特性から、冬の風物詩である「雪吊り」は、機能的かつ幾何学的に見栄え良く考慮され、高い造園技術を生み出すなど、特徴ある気候風土が、今日の金沢の文化や景観を育んできた。

春



金沢城公園の桜



カタクリの群生
(平栗自然環境保全区域)



早春のユキツバキ
(国見山自然環境保全区域)

夏



夏の兼六園



金沢城石川門（菖蒲）



花火大会

秋



秋の兼六園



アメリカカ風の並木

冬



冬の兼六園



雪吊り



長町武家屋敷のこもがけ

【都市別気象状況（平年値、年）】

	平均 気温 (℃)	最高 気温 (℃)	最低 気温 (℃)	平均 風速 (m/s)	日照 時間 (時間)	降水量 (mm)	降雪の 深さ合計 (cm)	降雪の 深さ最大 (cm)
金 沢	14.3	18.2	10.8	4.1	1,667.5	2,470.2	360	53
東 京	15.9	19.7	12.5	3.3	1,847.2	1,466.7	13	7
名古屋	15.4	20.2	11.4	2.9	2,053.4	1,564.6	13	7

資料：気象庁 HP

統計期間は 1971 年～2000 年

(ただし平均風速は金沢が 1991 年～2000 年、東京・名古屋が 1975 年～2000 年)

【金沢市における気象状況】

	天気日数(日)				
	快晴	曇天	雪	雷	降水 1.0mm 以上
2004 年 (H16 年)	18	173	45	46	171

資料：金沢地方気象台

(3) 植生

金沢の植生は、冬の季節風による多雪と対馬海流の影響を受ける日本海側特有の気象条件が深く関係し、また、海岸から 1,000m をこえる山々に至る変化に富む地形条件から、暖地系、寒地系両方の植物が混在している。さらに、日本海地域に主に分布する植物が多く生息している。

●山 地

戸室山、医王山地域等では、クリ、ミズナラ、ブナの林が見られる。また、内川ダムより奥の地域では、低い山地に残された貴重なブナ林があり、また、犀川源流の地域には、広大な自然度の高いブナ林が見られる。

●丘陵地から低山地

里山の雑木林として、人々の生活と密着した利用がなされてきたところであり、モウソウチク、コナラ、アカマツ等の林が広がっている。林には、カタクリやスミレ類等の花が咲き、昆虫や哺乳類、猛禽類といった多様な動物の生息場所ともなっている。

●河岸段丘の斜面緑地

市内を貫流する犀川、浅野川により、幾層もの河岸段丘が形成されている。段丘の斜面では、「金沢市斜面緑地保全条例」(平成9年制定)により、緑地の保全が進められている。

●海浜、河北潟

河北潟は、干拓事業によって約3分の2が干拓された。河北潟へ注ぐ用水路には、ミズアオイやアサザといった、絶滅危惧種にも指定されているものをはじめ、トチカガミ、ヒシ、ヒメガマ等の湿地や水辺の植物の生育の場となっている。海岸部の砂浜には、約250種の植物が生息しており、うち18種が砂浜固有種となっている。

(4) 歴史

【主な歴史的要因】

原始・古代	紀元前 5000 年	縄文土器を作り、竪穴式住居に住む (北塚遺跡、チカモリ遺跡、東市瀬遺跡など)
	紀元前後	稲作が始まる (梅田B遺跡) 金属器の使用が進む (塚崎遺跡)
	300~400 年	古墳の築造が始まる (おまる塚古墳、びわ塚古墳、おちん山古墳など)
	718 年 (養老 2 年)	越前国を分けて能登国を置く (第一次能登立国)
	741 年 (天平 18 年)	能登国を越中国に併合する
	749 年 (天平 21 年)	越中の国司大伴家持が能登をまわる
	757 年 (天平勝宝 9 年) 823 年 (弘仁 14 年)	越中国を分けて能登国を再び置く (第二次能登立国) 越前国の江沼・加賀二郡を割いて加賀国を置く (加賀立国)
中世	1181 年 (治承 5 年)	加賀国の林氏、富樫氏、井家氏ら義仲に従う
	1335 年 (建武 2 年)	足利尊氏が富樫高家に、加賀国守護職を充て行う
	1475 年 (文明 7 年)	加賀国の本願寺門徒が一揆を起こし、同国の寺社等が炎上する
	1488 年 (長享 2 年)	加賀で一向一揆が起こる (1580 年まで加賀国を支配)
	1545 年 (天文 14 年)	本願寺が小立野台地に金沢御坊を建設する
近世	1580 年 (天正 8 年)	金沢御坊が佐久間盛政勢に攻められ陥落する
	1583 年 (天正 11 年)	前田利家が金沢城に入城する
	1592 年 (文禄 元年)	金沢城の石垣や主な建築物ができる
	1610 年 (慶長 15 年)	金沢城の外堀が完成する
	1632 年 (寛永 9 年)	板屋兵四郎が辰巳用水をつくる
	1643 年 (寛永 20 年)	金沢城内に東照宮 (尾崎神社) ができる
	1768 年 (明和 5 年) 1822 年 (文政 5 年)	天徳院が再建される 竹沢御殿が完成、その庭園を兼六園と命名する
明治	1871 年 (明治 4 年)	廃藩置県により、金沢県ができる
	1874 年 (明治 7 年)	県が兼六園を公園として管理、一般公開される
	1875 年 (明治 8 年)	尾山神社神門ができる
	1881 年 (明治 14 年)	金沢城で大火が起こる (石川門及び三十間長屋以外は消失)
	1889 年 (明治 22 年)	金沢市制が施行する (推計人口 94,209 人) 大日本帝国憲法が公布する
	1891 年 (明治 24 年)	旧第四高等中学校 (石川四高記念文化交流館) が完成する (金沢開市三百年祭開催)
	1894 年 (明治 27 年)	日露戦争が起こる
	1898 年 (明治 31 年)	金沢駅が開業する
	1899 年 (明治 32 年)	旧県立第二中学校 (金沢くらしの博物館) ができる
	1907 年 (明治 40 年) 1909 年 (明治 42 年)	旧金沢貯蓄銀行 (町民文化館) ができる 旧陸軍第九師団兵器支廠兵器庫 (石川県立歴史博物館) ができる

第1章 金沢の景観特性と課題

大正	1914年	(大正 3年)	中橋～金石間にはじめて電車開通、第一次世界大戦が起こる
	1919年	(大正 8年)	市内電車が運転を開始する
	1922年	(大正 11年)	浅野川大橋が完成する、梅の橋が復旧する
	1923年	(大正 12年)	中の橋が架け替え、金沢市祭が開催される
	1924年	(大正 13年)	旧県庁舎ができる、犀川大橋が完成する
昭和	1929年	(昭和 4年)	世界大恐慌が起こる
	1931年	(昭和 6年)	満州事変が起こる
	1945年	(昭和 20年)	第二次世界大戦で日本が敗戦する
	1946年	(昭和 21年)	日本国憲法が発布する
	1952年	(昭和 27年)	第1回百万石まつりが開催される
	1967年	(昭和 42年)	市内電車が全面廃止する
	1968年	(昭和 43年)	「金沢市伝統環境保存条例」を制定する
	1970年	(昭和 45年)	金沢港が一部開港する
	1973年	(昭和 48年)	武蔵ヶ辻市街地再開発事業が完成する
	1974年	(昭和 49年)	「緑の都市宣言」を議決する
1986年	(昭和 61年)	香林坊市街地再開発事業が完成する	
平成	1989年	(平成 元年)	「金沢市における伝統環境の保存及び美しい景観の形成に関する条例」を制定する
	1992年	(平成 4年)	市議会が「景観都市宣言」を議決する
	1996年	(平成 8年)	中核市に移行、金沢市民芸術村ができる
	1998年	(平成 10年)	市議会が「環境都市宣言」を議決する
	1999年	(平成 11年)	金沢ふらっとバスが運行を開始する
	2003年	(平成 15年)	石川県庁が移転する
	2004年	(平成 16年)	金沢 21 世紀美術館が開館する
	2005年	(平成 17年)	御影大橋が開通（架け替え）、金沢駅東広場が完成する
2006年	(平成 18年)	金沢外環状道路（山側環状）が全線開通する	
2009年	(平成 21年)	「金沢市における美しい景観のまちづくりに関する条例」を制定する	

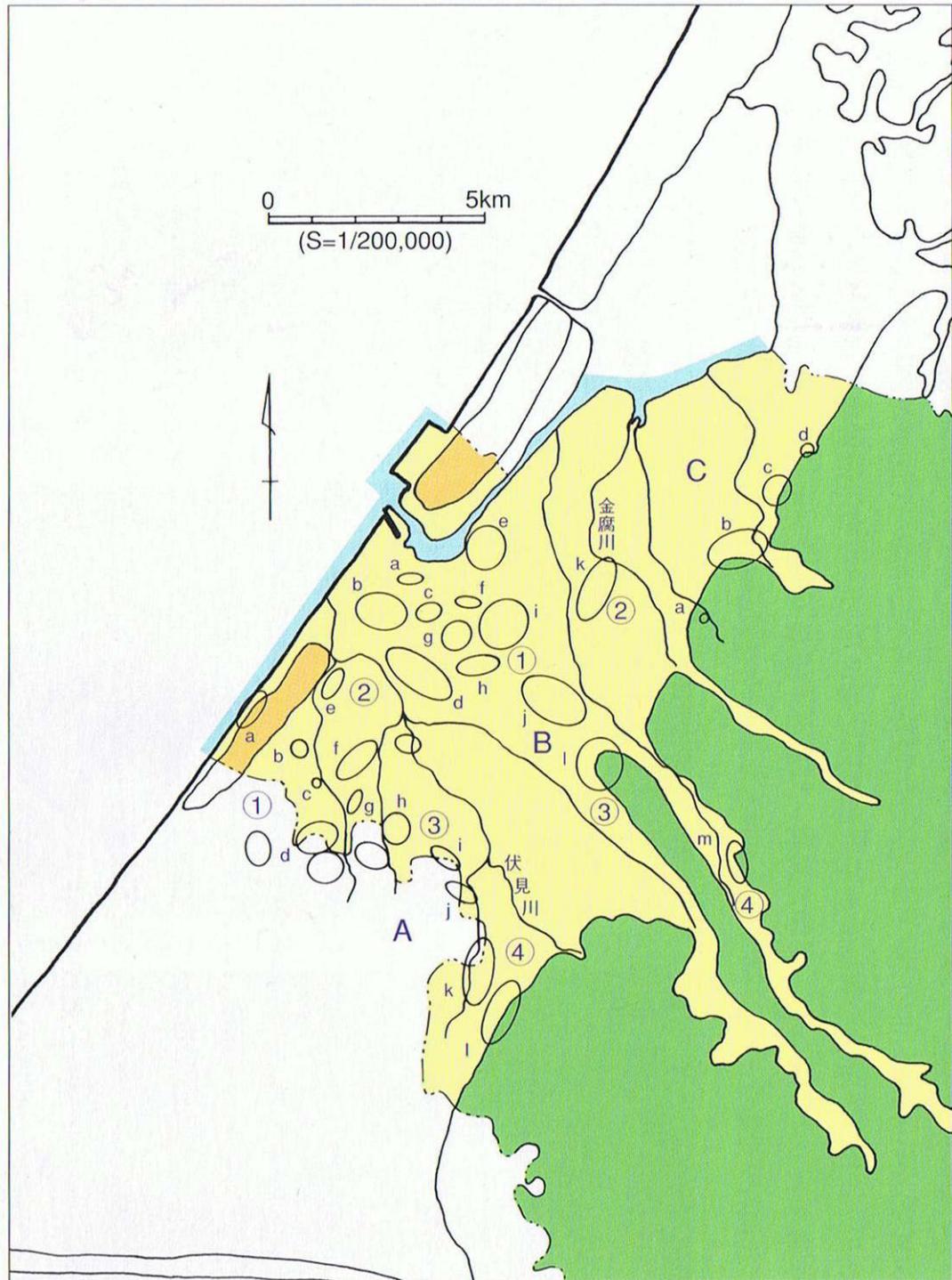
1) 原始・古代

本市では、縄文時代中期の北塚遺跡、縄文時代晩期のチカモリ遺跡等が調査により発掘されている。チカモリ遺跡においては、縄文人が高度な建築技術を持っていたことを証明した遺跡であり、日本で初めてクリの巨大木柱根が 350 本以上発見されており、国指定史跡となっている。

また、金沢市域には、石川県内の弥生時代遺跡の約 2 割が所在しており、その 8 割弱はムラ（集落）跡である（平成 13 年文化庁調べ）。

弥生時代は、本格的な水田稲作を生産の基軸に据えた時代であることから、ムラも平野部に立地するのが通例であり、金沢も同様である。

【金沢市域の弥生時代遺跡の分布図】



- | | | | |
|--------------|-------|------------------|-------|
| A 伏見川左岸 | | B 伏見川右岸～金腐川左岸 | |
| ①安原川左岸 | (a～d) | ①犀川右岸～浅野川左岸沖積平野 | (a～j) |
| ②安原川右岸～十人川左岸 | (e～g) | ②浅野川右岸～金腐川左岸沖積平野 | (k) |
| ③十人川右岸～高橋川左岸 | (h～j) | ③小立野台地先端周辺 | (l) |
| ④高橋川右岸～伏見川左岸 | (k・l) | ④浅野川右岸河岸段丘 | (m) |
| | | C 金腐川右岸 | (a～d) |

資料：金沢市史・通史編（原始・古代・中世）

2) 中世

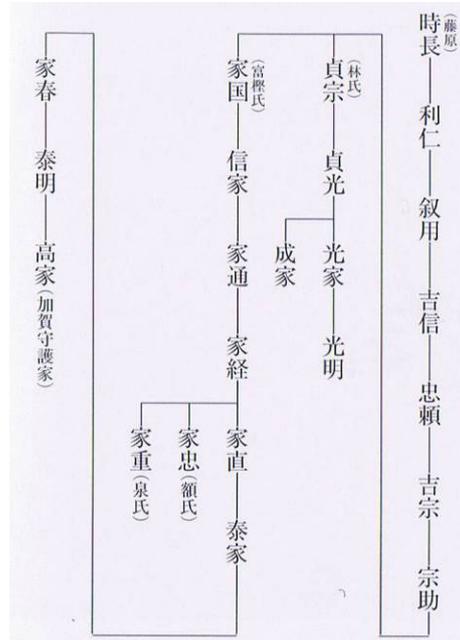
① 武士社会の到来

鎌倉時代は、武士が社会の中心となる。

加賀国では、林氏、富樫氏、井家氏、倉光氏等が代表的な武士団であるが、鎌倉幕府を開いた源頼朝は、彼らのような代表的な武士団であった在地領主勢力を御家人として掌握し、その基礎を築いている。

なかでも富樫氏は、御家人富樫泰家・家春父子らの活躍によって、鎌倉時代末期になると、加賀守護と見なされるほどの存在に成長し、後代以降大いに発展する基礎を築いた。

【平安・鎌倉期の富樫氏系図】



資料：金沢市史・通史編（原始・古代・中世）

② 金沢御坊と寺内町

室町時代は、金沢周辺で本願寺を中心とした浄土真宗(一向宗)の信仰で団結した門徒たちが、支配者層と対立するようになり、一向一揆を起こす。

この一揆により、1488年(長享2年)、この地方を治めていた加賀守護の富樫政親は高尾城で討ち滅ぼされる。その後100年余り、加賀は一向宗門徒たちが支配する「百姓ノ持チタル国」となる。

1545年(天文14年)、本願寺は加賀の直接支配を目指し、犀川・浅野川に挟まれた小立野台地の先端に、新たに北国の総本寺として金沢御坊の建設を始め、翌年に完成する。金沢は、この金沢御坊と寺内町として誕生する。

【金沢城公園極楽橋】



金沢御坊が建っていたとされる場所

資料：金沢市史・通史編（原始・古代・中世）

3) 近世

① 寺内町から城下町へ

1580年（天正8年）、佐久間盛政によって金沢御坊は陥落する。

盛政による城下町形成の特徴は、寺内町時代に大手は尾坂口であったのに対し、城下町に変換するにあたり、西町口に改めたことである。

西町口への大手の変更により、金沢城の北西の西町口の外に、寺内町から移転させた町人等を置き、新たな城下町の中心市街地を形成したと考えられる。これが、佐久間盛政の時代に町立てされたとされる尾山八町である。

② 利家による城下町の形成

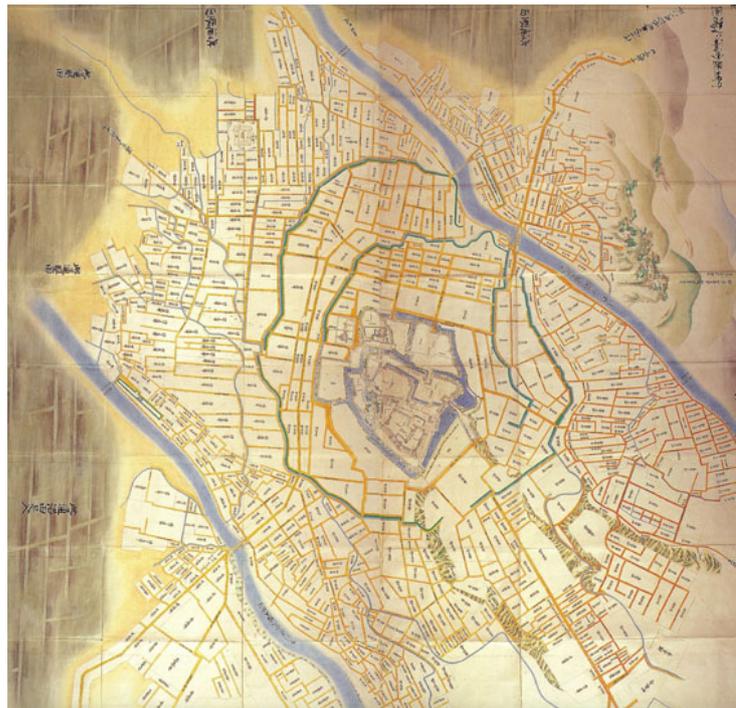
1583年（天正11年）、前田利家が金沢に入城する。

金沢の都市としての形態が整うのは、前田利家の金沢城入城以降であり、以後急速に城下町の建設が進められ、17世紀中頃には、ほぼ城下町としての体制が整えられた。

利家が城下町の形成で最初に行ったことは、金沢城郭内の武士町化と城郭の整備と推測される。利家入城時には、二・三ノ丸にも町人が住んでいたが、1592年（文禄元年）までには、二・三ノ丸、西ノ丸、北ノ丸まで武士町化され、金沢城の石垣が整備される。1599年（慶長4年）には新丸が武士町化され、ほぼ金沢城郭の形態ができあがる。城下町金沢は、防御を第一としつつも、地域経済の中心地として機能すべく、武士町・町人町・寺町等が計画的に形成された都市である。

街並みは、城を中心として武士から町人へと同心円的に取り巻くように形成されている。街路網は、北国街道、宮腰往還、湯涌往還、鶴来道等の主要な街道や往還および幹道が骨格を形成し、それらの間に土地利用に応じた枝道が網の目のように張り巡らされている。

【金沢城下図】



資料：金沢城下図 延宝年間（1673～1680）
金沢市立玉川図書館蔵

第1章 金沢の景観特性と課題

4) 近代・現代

明治時代以降も、都市構造や土地利用は基本的に藩政期の街路形態や町割の上に成立している。明治維新以降、城郭は軍用地に、藩校は高等学校など、藩の関係施設はそれぞれ公的な施設に利用された。一般的武士階級の宅地は田畑等に転用されるものも多かったが、明治後期以降に細分化されて今日の住宅地を形成した。町家としての旧町人居住地は、明治以降も店舗の建ち並ぶ商業地区として継続してきた。一方、旧武士居住地は、宅地の細分化に伴い専用住宅化し、今日の高密度な市街地が成立してきた。

①明治期の金沢

明治期、武家の没落等から、武家地の公共的土地利用への転用、民有地としての売却による宅地等への土地利用転換と細分化等による変化が現れる。

一方、1898年（明治31年）に金沢駅が開業し、小松～高岡間に鉄道が開通する。

金沢駅の位置は、主として人家が少なく、土地の高低差が少ないこと等から、旧木新保六番丁の現在地が選定された。この立地は、現在に至るまで街路網やそれと関わる都市計画全体のあり方に大きく影響を与える。

②大正期以降の金沢

明治22年の市制施行当時、面積約10k㎡であった市域（旧市）は、大正から昭和まで段階的に3町22村の編入によって市域面積約467k㎡となっている。

【金沢市域の変遷】



明治22年	金沢市制施行（旧市）
大正14年	石川郡：野村、弓取村
昭和10年	石川郡：富樫村、潟津村、米丸村、鞍月村、栗崎村、大野町
昭和11年	石川郡：崎浦村、三馬村 河北郡：小坂村
昭和18年	石川郡：戸板村、金石町、大野村、二塚村
昭和24年	河北郡：川北村
昭和29年	石川郡：安原村、額村、内川村、犀川村、湯涌谷村
昭和31年	石川郡：押野村
昭和32年	金沢市押野地区の一部（御経塚町など）を野々市町へ 河北郡：浅川村
昭和37年	河北郡：森本町

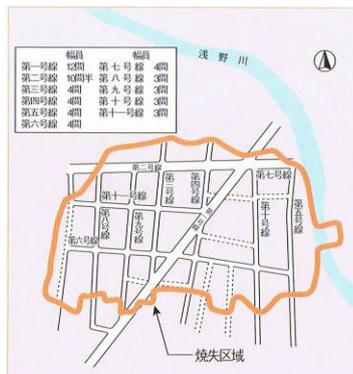
1919年（大正8年）には、市内電車網が都市交通手段として開通する。

藩政期の都市構造を受け継ぐ市街地に、金沢駅および城周辺、主要な放射状街路へ、既存の幹道を基本に拡幅整備された。商家が建ち並ぶ金沢の表通りであった幹道は、従前の建築物前面の意匠を継承するかたちで整備されたが、比較的短期間にそれらを一変させるような金沢の幹線道路沿道の商店街が形成された。

大正8年に都市計画法が公布され、金沢市においては、1923年（大正12年）に都市計画区域 987ha を設定し、1927年（昭和2年）に用途地域、1930年（昭和5年）に都市計画道路の決定を行っている。また、1928年（昭和3年）、明治期以降最大となる市街地火災（彦三大火）の火災復興事業として、本市で最初の土地区画整理事業が行われている。

また、彦三大火とその復興事業後、市内の道路の拡幅や道路網整備の重要性が強く認識されるようになり、主要道路の整備事業が進められた。

【彦三地区における復興街路計画】

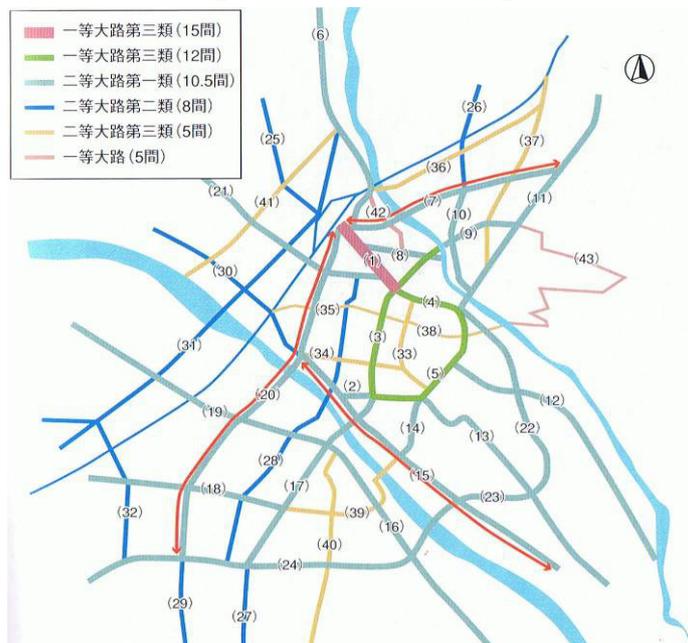


【昭和初期の南端国道】



昭和7年に完成した
県内初のコンクリート舗装道路

【昭和5年の街路計画】



資料：金沢市史・通史編（近代）

5) 歴史的建築

本市には、気候・風土や歴史的な変遷といった背景から、特徴的な歴史的建築が残っており、金沢の大きな景観特性となっている。

①城郭建築

現在、旧城内には、重要文化財の石川門・三十間長屋、鶴丸倉庫が残るほか、市内に金沢城所縁の登録有形文化財中村神社拝殿（旧二の丸能舞台）、尾山神社東神門（旧二の丸唐門）が残る。

②社寺建築

旧城下町区域には、曹洞宗、臨済宗、日蓮宗、浄土宗、浄土真宗、真言宗、天台宗など、各宗派の寺院建築が残る。これらの寺院は藩政期に形成された寺町・小立野・卯辰山山麓の各寺院群に集中して置かれているものと、民衆に溶け込むかたちで市域に分布するものとに分かれる。また、寺院に比べ数は少ないものの、金沢五社（卯辰八幡宮、犀川神明社、山上春日社、安江八幡宮、田井天神社）等の神社建築も残る。

③武士住宅

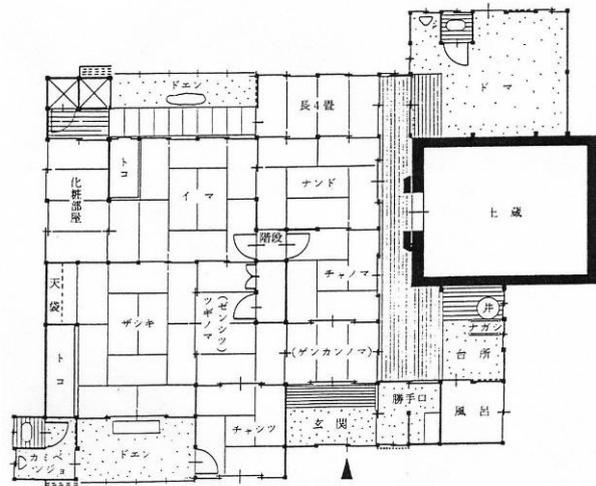
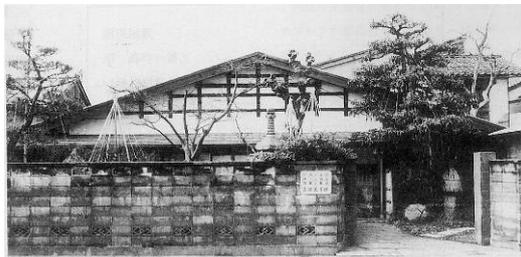
長町の武家屋敷に代表される金沢の武士住宅は、約 150～300 坪の敷地に、建坪 40 坪程度の建築物がある敷地利用が一般的である。

建築物平面は、シンプルな矩形で、奥行きより間口が長い建築物が多い。

外観は、正面に門構えと土塀を築き、その内に座敷庭や前庭の植栽が見越される。

また、その奥にある平屋で低く、間口方向に広がった緩勾配の切妻屋根が格式を感じさせる。特に、表構えとなる妻面は、漆喰壁に、束・貫が格子状に組み込まれた「アズマダチ」は、武家屋敷の特徴的な外観意匠（ファサード）である。

【武家屋敷の表構えと平面の例（泉家）】



平面図

資料：金沢の歴史的建築と町並み（平成4年3月、金沢市教育委員会）

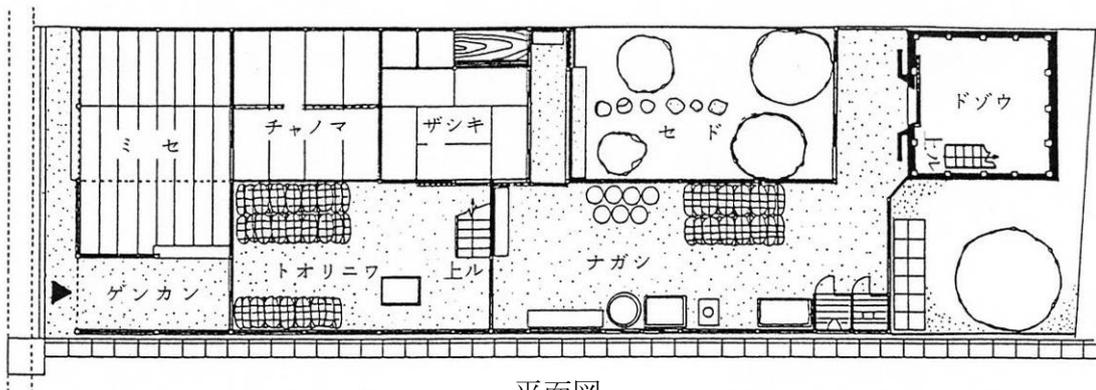
④町家

町人の住宅である町家は、職住併用の住宅であることから、武士住宅のように土塀を築く屋敷構えではなく、表の道に直接面して建つことが特徴の一つである。また、町人には、軒役という間口の広さに応じた課税があったことから、隣家と軒を接し、間口は狭く、奥行き方向に長いウナギの寝床のように建ち並んでいることも特徴的である。

一見、不便そうな建築物形態ではあるが、奥行きに長い建築物の中ほどに明かりを取る中庭や、商売や通風に適した表通りから裏庭（土蔵がある）まで通じたトオリニワ（土間）を設けるなど、機能的に様々な工夫がなされた町家は高密度な居住形態でありながらも当時の生活形式にかなったものであった。

また、建築物正面には、漆喰壁、格子、袖壁等の町家特有の形態意匠があり、美しい姿を見せている。

【町家の表構えと平面の例】



平面図

資料：金沢の歴史的建築と町並み（平成4年3月、金沢市教育委員会）

⑤農家

加賀藩では、一部の上層農家を除いて、家作に厳しい制限が加えられており、間口制限はもとより、内部の意匠についても制限されていた。

金沢の農家は、妻入りで茅葺きであったが、明治以降に行われた「建ち上げ」によって、自由に家が建てられるようになると、その姿は大きく変わる。

「建ち上げ」とは、茅葺き屋根をとりはらい、大きな切妻瓦葺きの屋根に変えることであるが、これに伴い、表構えは大きな切妻の三角妻壁が正面にあらわれ、梁と束を重ねた美しい「アズマダチ」となる。その結果、農家の表構えは武家屋敷に近いものとなっていく。

間取りは、前面に土間のにわをとり、中央に間口いっぱい広いオイをとって、奥に4室田の字型に部屋を並べるというものであった。

資料：石川の土木建築史（平成元年4月）金沢市史・資料編17・建築・建設

【農家の表構えと平面の例（旧高田家）】



資料：石川の土木建築史（平成元年4月）

⑥近代建築

明治時代中期以降の学都・軍都としての金沢の発展、また、繊維工業の発展や中核都市としての金融業の発展による都市の変容は、建築にも明確に反映されている。

今も金沢に残る近代建築物には、その時代の流れが色濃く残されている。

近代和風と称される建築物については、武士系、町家系に大別される。

武士系は、明治以降に細分化された武家屋敷跡に一般住宅を建築したことが始まりであり、建築物は簡略化され、土塀や板塀、生垣を有した2階建ての純和風住宅が主流である。町家系は、江戸時代の町家と同様に道路に直接面して建築することが基本であるが、2階の軒高が高いことが特徴である。

また、洋風建築は、明治維新後新しい西洋の文化が日本に流入したことにより、多くのものが建築されたが、これら洋風建築の多くは地元の大工により木造で建てられ、その意匠は徐々に民間建築にも普及した。

資料：石川の土木建築史（平成元年4月）他

【近代建築の例】



旧第四高等中学校
(現 四高記念文化交流館)



旧陸軍兵器支廠
(現 石川県立歴史博物館)

(5) 都市構造

1) 藩政期における金沢の姿

中心とする城下町の形態は、道路網や区画等が、今も変わらず受け継がれている。

【平成14年の数値地図に嘉永4年(1850年)の地図を重ねたもの】



資料：「金沢絵図」，嘉永4(1850)年，金沢大学文学部地理学教室所蔵

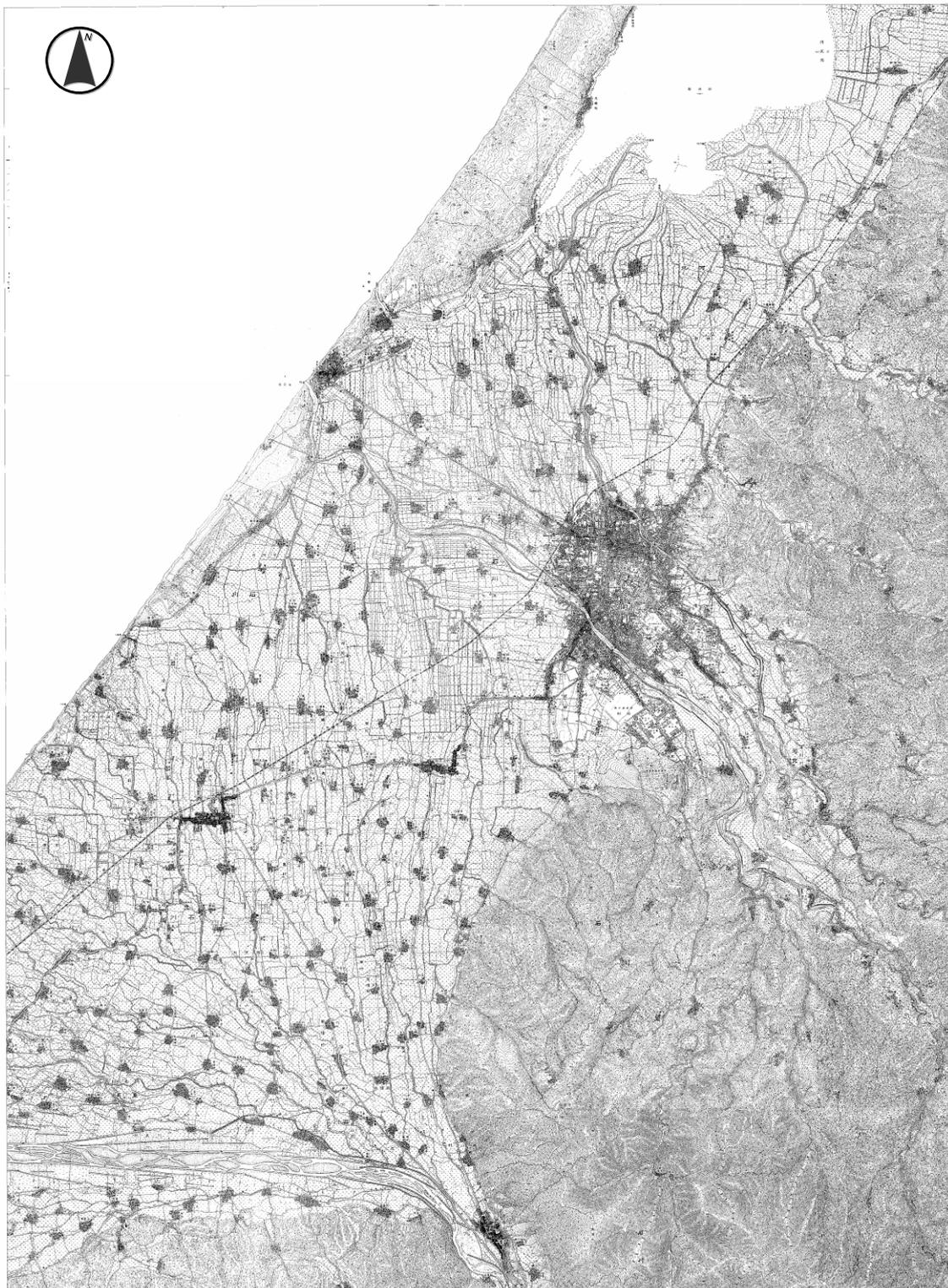
数値地図25000(地図画像)「金沢」，平成14(2002)年，国土院発行

金沢大学文学部 地理学教室 HPより

2) 明治期における金沢の姿

明治 40 年頃の金沢は、旧城下町の都市構造を残している。また、金沢駅以北の平野部は集落が点在するとともに、北前船の寄港地を背景とした金石地区周辺にまとまった集積が見られる。

【明治 40 年頃の金沢】



資料：地図で見る金沢の変遷（平成 9 年、(財) 日本地図センター）

3) 昭和期～平成期における金沢の姿

明治40年頃から昭和30年頃への変化は比較的緩やかであり、まだ旧城下町としての都市構造が残っていた。しかし、昭和30年以降は郊外部への市街地拡大が飛躍的に広がり、農地の減少が顕著である。

【昭和30年頃の金沢】



資料：地図で見る金沢の変遷（平成9年、(財)日本地図センター）

【平成6年頃の金沢】



資料：地図で見る金沢の変遷（平成9年、(財)日本地図センター）

4) 現代における都市構造の変化

本市では、戦後、特に高度経済成長期以降の市街地の進展とともに、広域交通網の整備による市域を越えた連携や、中心市街地や郊外部の都市基盤の整備が進み、景観上も大きな変化が生じている。

現代における主な都市構造の変化状況としては、以下のように整理される。

① 広域交通網

平成 26 (2014) 年度を予定している北陸新幹線の金沢延伸、また、船舶の大型化に対応した大水深岸壁や多目的国際ターミナルの整備が進む金沢港など、広域交通網の整備が進んでいる。



新幹線高架



金沢港大水深岸壁計画

② 環状交通

北陸自動車道に新しく整備された金沢森本 I C、金沢都市圏の渋滞緩和及び能登～金沢～加賀を結ぶ道路ネットワーク形成を目的とした金沢外環状道路の整備等が進んでいる。



北陸自動車道金沢森本 IC



金沢外環状道路山側環状

③ 都心軸

J R 金沢駅西広場整備 (平成 3 年)、金沢駅港線の全線供用 (平成 9 年)、新石川県庁開庁 (平成 1 5 年)、J R 金沢駅東広場整備 (平成 1 7 年) があり、現在、J R 金沢駅西広場の再整備など、都心軸の整備が進んでいる。



J R 金沢駅西広場



J R 金沢駅東広場

④ 郊外の都市基盤

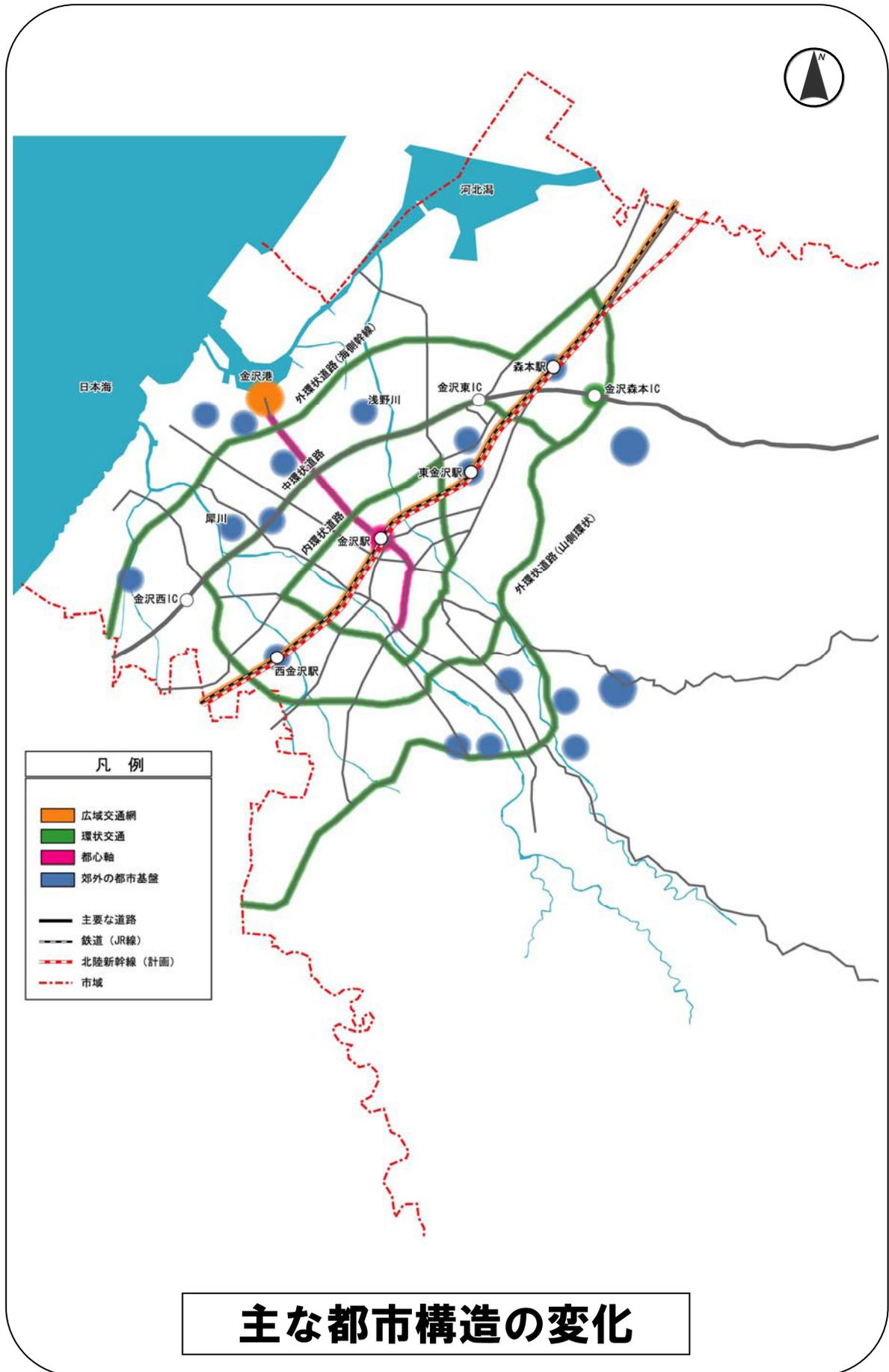
石川県庁周辺整備、J R 北陸本線の西金沢駅・東金沢駅・森本駅の各駅周辺整備、金沢森本 I C 周辺の金沢テクノパーク整備、金沢大学の移転整備など、郊外における都市基盤整備が進んでいる。



金沢テクノパーク



J R 森本駅



第1章 金沢の景観特性と課題

⑤土地区画整理事業

本市では、昭和3年の金沢市彦三地区の大火による火災復興事業を始まりとして、昭和30年代中頃から市街地において小規模な区画整理事業が徐々に始まっている。

その後、昭和45年の都市計画法改正に基づく「線引き制度」の創設により、全国で3番目となる市街化区域の線引きを行った際、地元全員同意による組合区画整理事業の施行を条件に新規に開発すべき住宅地としてスプロール化の恐れのある区域約1,000haを市街地周辺に設けるとともに、組合区画整理事業に対する国庫補助金交付制度が定められたことが影響し、事業の規模、件数は増大している。

近年では、市街地外縁部における都市基盤整備が推進されていく中、市民ニーズの多様化により、個性的で魅力ある都市空間の形成が求められているとともに、中心部の再整備を目的とした区画整理に目が向けられるようになっている。

【近年の主な土地区画整理事業】

区域名	面積 (ha)	都市計画決定 年月日
八日市第三地区	12.2	平成 1. 4. 4
	12.4	平成 4. 4. 1
鞍月	73.2	平成 2. 6. 5
小坂南地区	7.5	平成 2. 7. 11
金沢駅南地区	3.5	平成 2. 11. 1
金沢市昭和町地区	1.8	平成 3. 10. 21
	9.2	平成 4. 1. 21
金沢駅北	11.9	平成 7. 5. 22
	2.6	平成 5. 11. 1
上安原第一	5.8	平成 6. 5. 23
上荒屋東部	9.2	平成 6. 5. 23
安原中央	72.7	平成 6. 8. 5
金沢市田上第五、田上本町	98.2	平成 8. 6. 18
金沢市松村第二	28.2	平成 9. 6. 6
金沢市大桑第三	30.9	平成 10. 6. 12
金沢市三池	14.3	平成 10. 6. 22
	35.4	平成 10. 6. 12 (※)
金沢西部第二	35.4	平成 12. 2. 14 (※)
	51.1	平成 13. 6. 22
金沢市戸板第二	51.4	平成 15. 9. 24
	42.6	平成 18. 5. 12
金沢市副都心北部直江	27.5	平成 19. 12. 14
金沢市副都心北部大河端、大友		

※新規と最新の変更のみ

資料：金沢の区画整理（平成20年）

1-2 金沢らしい景観の構図と保全・継承

(1) 重層性のある景観の継承

金沢の景観は、長い時間をかけてつくられた「地形」が土台としてあり、その上に藩政期にかたちづけられた城下町の都市構造や農山村集落等に刻まれた地域の「歴史」が今に継承されている。建築様式にいたっては、時代の変遷の中で継承と変容を繰り返しており、今に残る金澤町家、農家住宅、近代建築等は金沢の「歴史」の層の厚さを物語る。

さらに、これら「地形」と「歴史」の積み重ねの上に、様々な「土地利用」が展開されている。このように、長い時間の中で積み重ねられてきた地形、歴史、土地利用の3つの構図が重なり合うことで、今日の重層性ある景観を形成していることが大きな特徴である。

金沢らしい風格と魅力を兼ね備えた景観形成のため、こうした重層性のある景観構造を大切に継承していく。

(2) 時間や暮らしと密接に関わる景観の保全・継承

長い歴史や伝統を経て人々に受け継がれてきた文化や暮らし、季節ごとの習わしや、日の出から日中、日暮れ、夜にかけての時の移ろいの中にも、金沢特有の景観が垣間見られる。こうした時間や人々の暮らしもまた、金沢らしさを表現する重要な構成要素のひとつである。

そのため、時間や暮らしと密接に関わる景観を大切に保全・継承していく。

【金沢らしい景観の構図】



時間や暮らし 1日(昼夜)、四季(春夏秋冬)、伝統・文化

◎ 3つの景観要素が重なり合い、金沢の個性ある景観の基盤となっている

- ① 地形 … 海岸、河川、河北潟、台地、平野、里山、山間地等の起伏豊かな地形
- ② 歴史 … 城下町の町割・街路網、農山村集落の歴史、遺跡、近代建築 など
- ③ 土地利用 … 住宅地、商業地、工業地、農地、森林等における都市経済・生産活動 など

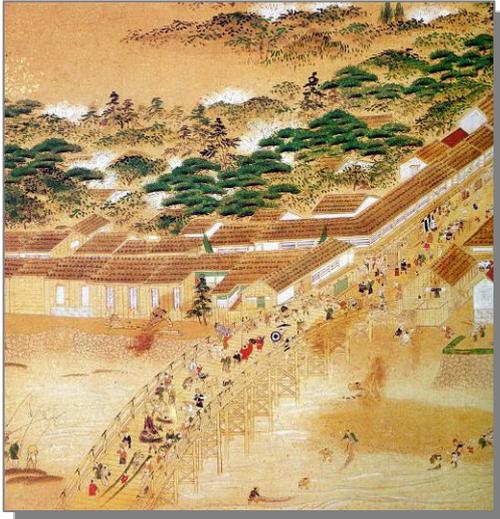
◎ 時の移ろいや日々の暮らし、文化を背景として彩りある景観を生んでいる

- ① 伝統・文化 … 文化や生活慣習とともに培われていく長い年月 (長年)
- ② 四季 … 金沢ならではの鮮やかな四季の変化 (1年)
- ③ 一日(昼夜) … 昼・夜の生活のリズム (1日)

(3) 金沢の時代と暮らし景観 ～ 時代の移り変わりを積み重ねる金沢の景観 ～

金沢は、時代が刻々と移り変わる中にも、それぞれの時代の良さを残しながら、古いものと新しいものが重なり合い、独特の魅力と風格のある景観を形成している。

こうした時代の重層性ある景観が、市民の日々の暮らしの中に溶け込み、さらに深みある景観として受け継がれていくことが大切である。



江戸時代における犀川大橋から片町方面の街並み。

石置屋根の家々が立ち並び、犀川は石積みで護岸されている。

犀川では魚を取ったり、釣りに興じる人々の風景が見られ、橋は往来する多くの人で賑わっている。

また、通りの裏手は松等の緑が広がり、ほとんど土地利用がされていない。

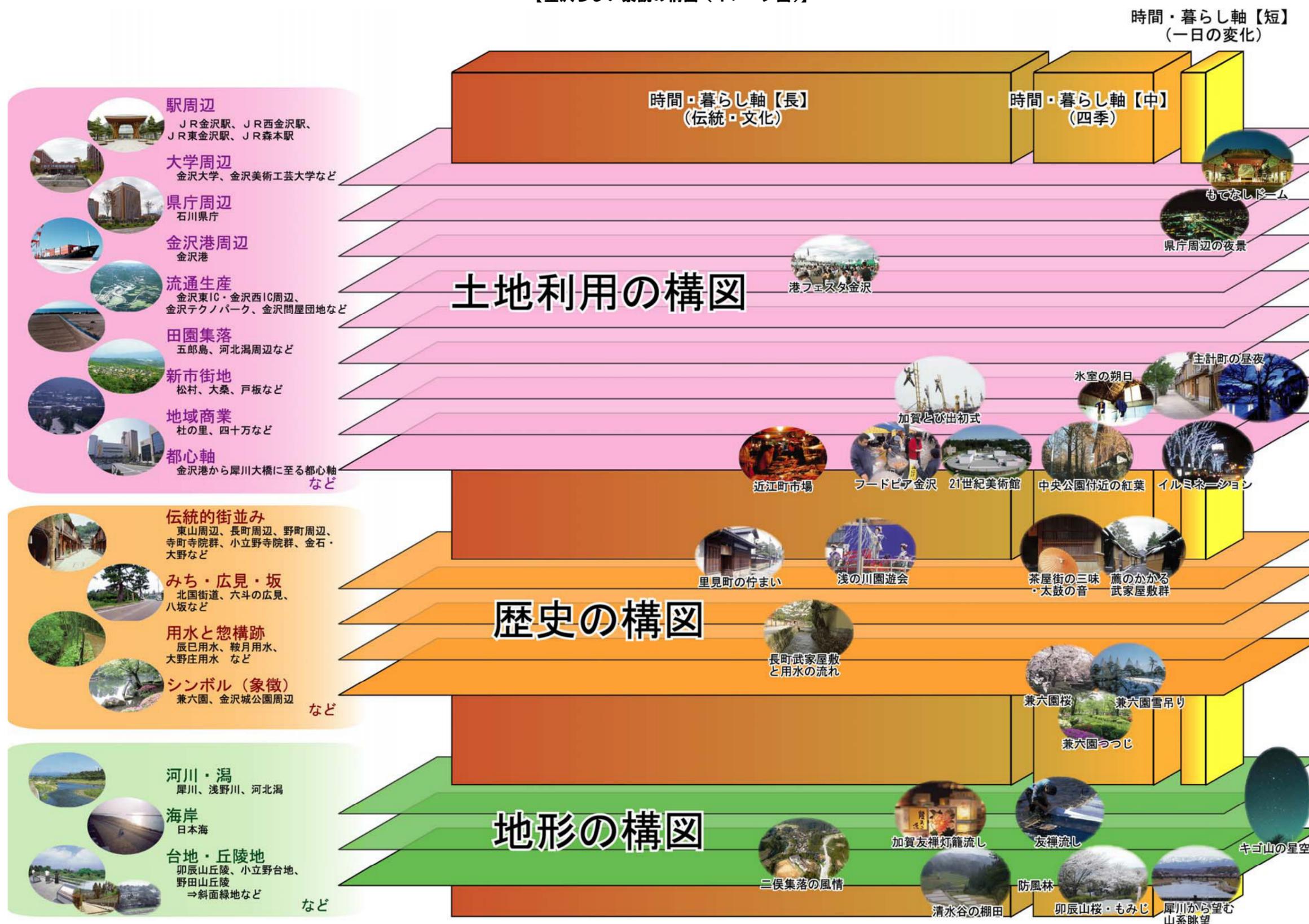
犀川大橋から片町方面の街並み（金沢図屏風より）

[資料：写真図説 金沢の五〇〇年

（編著／田中喜男／国書刊行会）]

(4) 金沢らしい景観の構図 イメージ図

【金沢らしい景観の構図（イメージ図）】



1-3 空間的に捉えた金沢の景観文脈

金沢市都市景観形成基本計画（平成4年）では、金沢の景観構成を“景観文脈”として7つの属性（定位、連続、中心と周縁、集積、対比、眺望、縁）で表現し、それぞれ方針を掲げている。これは、都市景観を構成する様々な資源について、相互の関係性の中で把握・認識し、個別の景観形成に活かしていくことを目指したものである。こうした景観相互の関係性を文脈として読み取ることは極めて重要であり、本計画においても空間的に景観文脈を捉えるとともに、関係性を読み解く範囲を新たに市全域に広げて整理する。

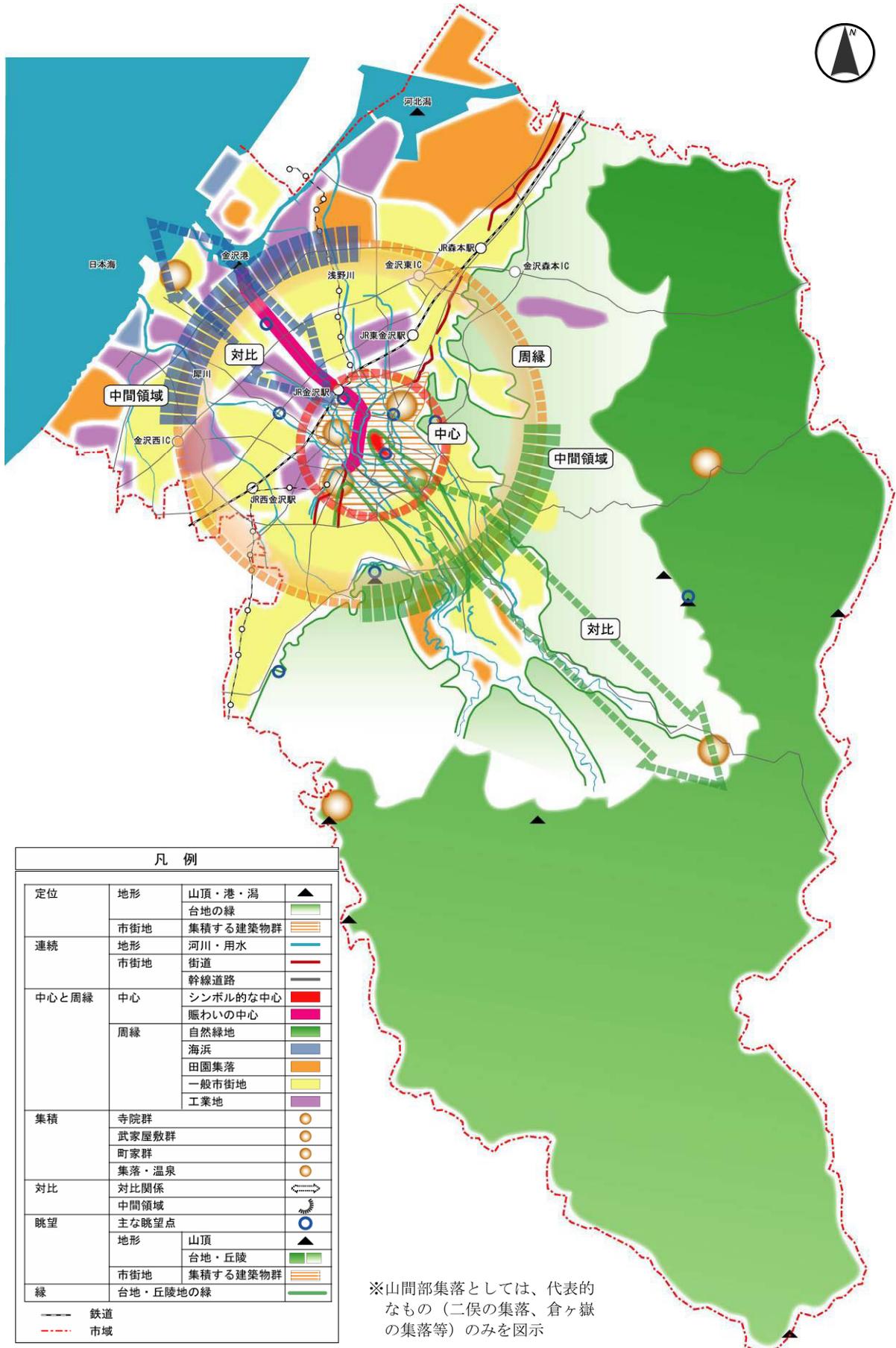
【7つの属性の定義】

●定位
市街地から眺望される遠景の山々や、市街地のランドマークとなる高層の建造物等の特徴ある景観は、自分のいる場所の認識や方向性を与える。「定位」は、このように地形の特徴や大きなまちの構造を分かりやすく感じさせるものである。
●連続
河川や用水、道筋等の連続的・軸線的な景観要素は、この軸に沿って景観を体験することにより、景観の変化や、移り変わる街並みのたたずまいを体験できる。「連続」は、このような移動視点の流れに伴って把握されるものである。
●中心と周縁
金沢の中心市街地の構成は、藩政期の金沢城を中心とする同心円的な構造を現在に受け継いでいる。景観体験としてのこのような構造は、城の石垣や石川門等の中心性を象徴する景観要素と、河川等の自然的景観要素や城に対する寺院群や郊外部の地域等周縁性を象徴する景観要素から成り立っており、「中心と周縁」は、このような大きな景観上の構造が把握されるものである。
●集積
金沢らしい代表的な景観として、寺町・小立野や卯辰山山麓の寺院群、長町の武家屋敷群等があげられる。歴史的な土地利用を反映したこのような地区は、景観面からは特徴ある街区構成、細街路網、建造物群の表情から成り立っており、「集積」は、このような特定の領域における景観が把握されるものである。
●対比
金沢のまちの特徴と面白さのひとつは、街並みや建造物の時間的・空間的な連続性と重複性にあり、聖と俗、繁華と静寂、表と裏等の対比が地区の景観に歴史的な深みと、空間的な多様性を与えている。「対比」は、このようなまちの組立と変化が把握されるものである。
●眺望
金沢は、主に2つの河川と、3つの台地・丘陵の地形が特徴的な空間領域をつくり上げており、街並みの景観の背景ともなっている。「眺望」は、このような金沢のマクロな地形構造・まち構造の特徴が把握されるものである。
●縁
台地の縁や丘陵の斜面には、それぞれの由緒がある様々な坂があり、石段や石垣等がある。坂の上からはダイナミックなパノラマ景観が広がり、坂の上り下りを通して景観が変化し、坂の上下では劇的に異なる景観が体験できる。また、このような縁を眺めると、まちの景観に方向性を与える。「縁」は、このような変化と方向性を与える景観が把握されるものである。

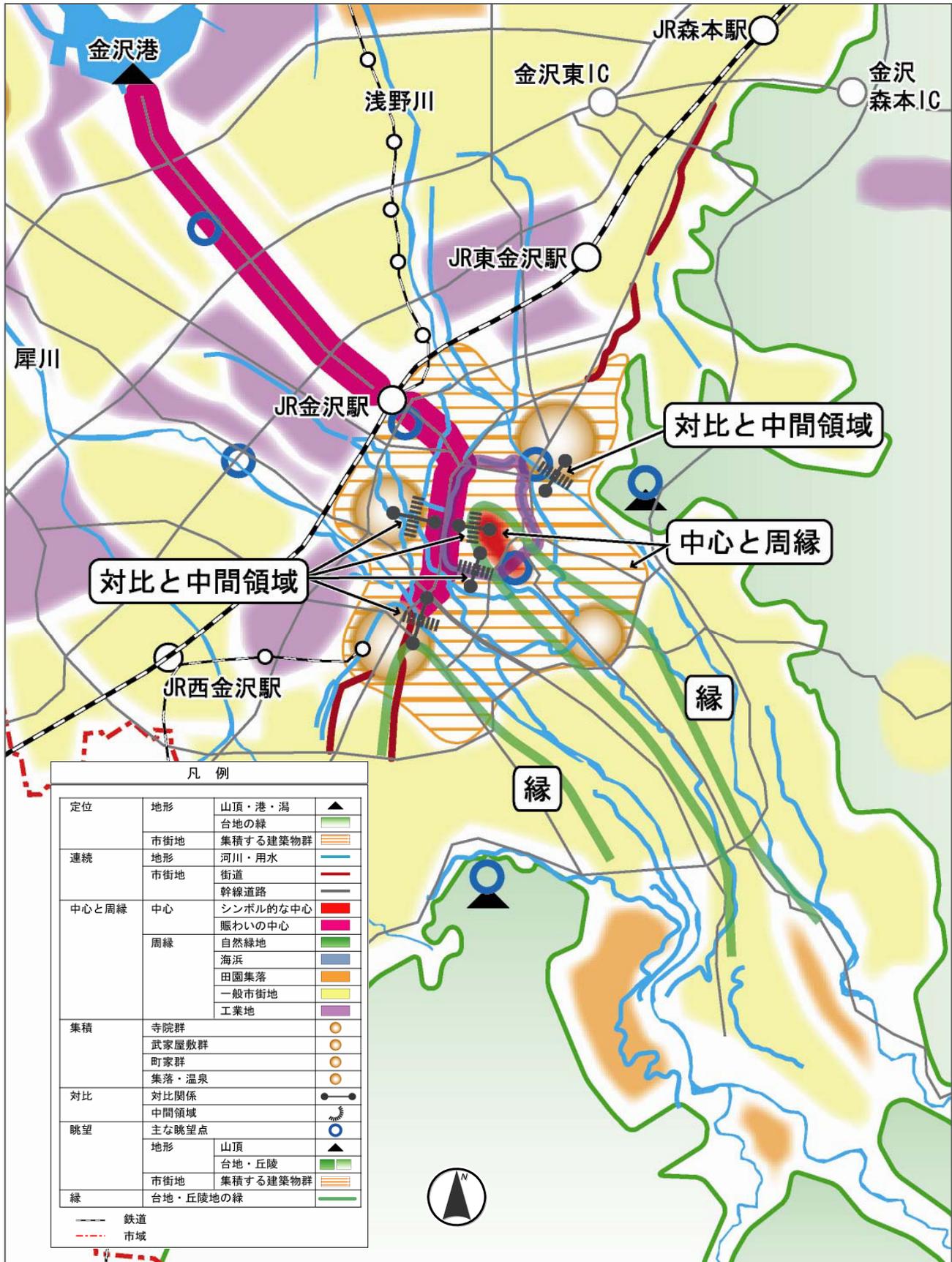
【景観のあり方・構造】

NO	分類	景観のあり方（基本方針）	景観構造		
①	定位	特徴のある地形、建築物、視界等を把握することにより自分の位置を確認するものである。 特徴ある地形や建築物、視界等をアピールすることにより、位置を確認できるようにするため、遠景となる山々や丘陵を景観の構図の中で強調するとともに、これと対比するような市街地の建築物群がつくる輪郭線や特徴のある建築物等について、建築物の位置や形態を誘導する。	地形	山頂・港・潟 台地の緑	
			市街地	集積する建築物群 広見・坂、駅	
②	連続	連続的な景観要素によって、景観の変化やつながりを体験できるものである。 連続性や方向性を与える道筋・用水等の景観要素により、街の中に「流れ」を感じさせるよう、見通し、曲がり、蛇行につれ変化していく景観を演出するとともに、流れと交差する橋・交差点等のポイントを重点的に修景していく。	地形	河川・用水	
			市街地	街道 幹線道路	
③	中心と周縁	景観における中心的な要素と周縁的な要素を対比させ、景観の大きな構造を確認できるものである。 金沢のシンボリックな中心である金沢城跡周辺を強調するため、石垣、兼六園の森等の歴史的な中心的景観要素を守り、活かしていくとともに都心軸など、これと対比を際立たせるような賑わいの中心性のある景観をつくり出していく。 都市化の進展等に伴って拡大した住宅、工業地等については、快適で安全・安心な居住環境・就業環境を形成しつつ、地域の歴史文化や自然環境と調和した景観となるよう、修景していく。	中心	シンボリックな中心 賑わいの中心	
			周縁	自然系	自然緑地
					海浜 田園集落
			市街地系	一般住宅地 工業地	
④	集積	特定の景観資源が集積し、領域としての同質性、一定のイメージを形成するものである。 武家屋敷、寺院、町家、集落の集積地のそれぞれについて、領域としての特徴あるイメージを継承するよう、歴史的街区割・道路空間の構成・街並みや建築物の表情を保全・修景していく。	寺院群		
			武家屋敷群		
			町家群		
			集落	温泉街	
⑤	対比	聖と俗、静寂と繁華等の領域を対比させることで、空間の持つイメージと性格を明確にするものである。 金沢のまちのしくみの面白さとなっている、時間的・空間的な連続性と重複性を際立たせていくため、特徴のある各領域間の形態を対比的に調和させるとともに、各領域間を結びつける中間領域や連続要素を修景することにより、景観の対比を演出する。	対比関係		
			中間領域		
⑥	眺望	明確な地形や変化あるまちの構造を読み取るものである。 金沢の明確な地形構造・まちの構造の特徴を感じとれるよう、台地や丘陵等の地形を際立たせ、地形の特徴を阻害する要素を除いていくとともに、眺望される対象としての市街地の建築物のボリューム、屋根や建築物上部の形態等を誘導していく。	主な眺望点（坂など）		
			地形	山頂	
				台地・丘陵	
市街地	集積する建築物群 坂				
⑦	縁	台地、段丘の斜面緑地等の変化ある地形の面白さを感じさせるものである。 金沢の地形の特徴と面白さを感じる場として、中心・対比・連続・眺望等の景観の構造を生かしながら、縁や坂道の表情、縁を取り囲む市街地の建築物を修景していく。	台地・丘陵地の縁		

【金沢の空間的景観文脈全体像】



【まちなか周辺の空間的景観文脈】



1-4 景観まちづくりに向けた課題

景観まちづくりをめぐる社会的背景を整理するとともに、本市における景観まちづくりに向けた課題を取りまとめる。

【景観まちづくりをめぐる社会的背景】

○ まちづくりに対する様々な視点

地球環境問題の深刻化や自然環境の保護、資源の有効利用や省エネルギー等が重要視され、また、市民と行政が協働して取り組むまちづくりが求められている。

- 環境との共生（自然にやさしいまちづくり、地域植生にあった緑化、ビオトープなど）
- 市民参画による計画づくり
- 市民との協働、多様な主体による景観まちづくり
（NPO・ボランティアや民間事業者など）
- 人にやさしいまちづくり（ユニバーサルデザイン）
- 歩けるまちづくりとコンパクトシティの実現
- 地域の個性を活かしたまちづくり（歴史、伝統文化、自然環境の活用など）

など

○ 人々の生活様式の変化や価値観の多様化

経済情勢の激しい変容、情報技術の高度化等によって、人々の生活様式の変化や価値観にも多様化が生じている。

- 利益至上主義（差別化が進む商業主義）
- 情報技術の高度化（インターネット、マスメディアなど）
- 生活の24時間化（コンビニエンスストアなど）
- グローバルスタンダードとローカルスタンダード
- プライバシーの確保
- 個性の尊重

など

○ 地域間交流の活性化と都市構造の変化

都市・交通基盤の整備等によって、より広範囲における地域間交流が進むとともに、中心市街地や郊外部の環境を充実・向上させる事業が進み、景観上も大きな変化が生じている。

- 広域交通網の整備（金沢外環状道路、北陸新幹線など）
- 交通結節点および周辺の整備（金沢駅、東・西金沢駅、森本駅、金沢港など）
- 土地区画整理事業による都市基盤整備（駅西新都心、郊外住宅地など）

など

○ 適切な空間マネジメント

地域空間の適切な維持管理、運用、更新による持続可能なまちづくりが求められている。

- 中心市街地における土地利用の健全な新陳代謝（駐車場問題、まちなか定住など）
- 郊外住宅地の高齢化、中古共同住宅の更新など
- 後継者不足による土地の荒廃、家屋の継承・活用（農地、森林、町家など）
- 日常空間の維持管理に伴う課題（武家屋敷、町家、庭、駐輪場など）
- コスト削減とアセットマネジメント（資産管理・運用）
- 商店街の活性化、業務ビルの高空室率
- バリアフリー・ユニバーサルデザインの推進
- 道路や公園・街路樹の維持管理（公共空間の維持管理、民間活力の導入：PFI）
- NPOや民間による景観資源の管理

など

【景観まちづくりに向けた課題】

(1) 景観形成施策の継承と発展

本市はこれまで、景観条例に基づく様々な施策展開を先進的に進めてきた。今後も、それらの施策を継承していくとともに、歴史都市の推進や世界遺産登録に向けた動き、歴史遺産の価値向上など、本市における将来的な方向性を見据え、これまでの景観形成施策を更に発展させた施策を展開していくことが大切である。



ひがし茶屋街

(2) 共感・共有できる景観まちづくり

本市は、全国的にも早くから景観形成の取り組みが行われていたこともあり、行政だけでなく、市民の景観に対する意識も高い。しかし、その一方で、地域によっては、目立つことを優先する商業店舗の増大や地域コミュニティの弱体化等により、街並みに対する気配りが薄れてきている現状も見られる。

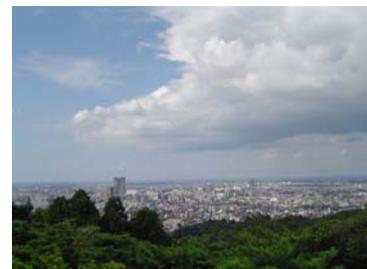
このため、日頃から身近な景観に関心を持てるよう、市民にもわかりやすい景観行政を推進し、金沢らしいまちの姿を共感・共有できる景観まちづくりを展開していくことが必要である。



金沢の景観を考える
市民会議

(3) 市全体を捉えた取り組み

本市には、様々な時代の変遷を経てつくり上げられた重層的な景観が存在する。これら魅力ある景観を守り、育て、活かすため、まちなかの武家屋敷群、武士系住宅・町家の集積地、寺院群や香林坊等の商業地等については、多様な景観施策が講じられている。その一方で、郊外部を中心とした集落地、住宅地等や工業地については景観施策が少なく、市全域を見据えた景観誘導の展開が必要である。



郊外から市街地を望む

(4) 先導的役割を担う公共空間の整備

観光都市である金沢には、毎年、多数の観光客が訪れる。現在、JR金沢駅周辺は、もてなし空間として修景整備を進めているが、今後も、金沢港周辺やJR金沢駅以外の駅、インターチェンジ周辺等の交通結節点や主要な公共空間では、地域における先導的な役割を果たすよう、良好な景観形成に向けた整備を進める必要がある。



駅東広場（JR 金沢駅）

(5) 暮らしに根ざした景観まちづくり

景観形成は、全国的に見て、観光客等をもてなすための取り組みとして重要視されがちであるが、本来、そこに暮らす市民の暮らしがあり、伝統・文化として時を積み重ね、受け継がれてこそ、真に美しいまちが育まれるものである。そのためには、それぞれの地域の歴史的背景や誰もが共感・共有できる市民の暮らしに根ざした景観形成が大切である。

また、経済の著しい変容や情報技術の高度化、生活の24時間化など、我々を取り巻く環境の変化に応じて生活様式が変化し、価値観も多様化してきている。こうした時代の変化に対応しながらも、本市の魅力ある景観の保全・継承と市民の快適で豊かな暮らしとが連動した景観まちづくりを推進することが大切である。



加賀友禅灯籠流し



金沢百万石まつり

